

宮内陽子・戸田昭治・鈴木秀一 三教授 退職記念号によせて

札幌学院大学人文学部長
人文学会長 中野徹三

本学人文学部は、昨年をもって20周年を迎え、今、目前に迫った21世紀における大いなる次の飛躍をめざして、学部改革の課題に取り組んでいる。

この時にあたり、本学部の設立と発展に大きく貢献された三人の先生を送り出さねばならないことは、学部構成員一同ひとしく、強い寂寥の感を覚えざるをえない。

宮内陽子先生は、1953年3月北海道大学文学部を卒業されたのち、同大学大学院文学研究科に進学、西洋哲学を専攻され、その後、中央大学哲学科助手、アラブ文化図書館勤務等を経て1967年4月、本学の前身であり、時まさに札幌商科大学（本大学の当初の校名）の開設を準備中であった札幌短期大学に専任講師として着任された。したがって先生は着任と同時に、短大教員としての実務のほかに、4年制大学の開設準備というただならぬ激務をも少数の短大同僚とともに担われたのである。

その後31年間、先生は札幌短期大学、さらに本学人文学部の専任教員として、本学の苦難に満ちた、しかし輝かしい歴史の一時代を担いつつ、倫理学、歴史哲学、哲学的人間学の分野で、貴重な業績を重ねられた。最近では、特に脳死を含む生命倫理の問題に強い関心を寄せられたお仕事を重ねられ、国際生命倫理学会（IBA）の会員にもなられている。また本来のお仕事の外に、この2～3年は本学園の50周年記念事業の一環である学園50年史の編纂委員会の委員長として、ご退職後の今もなお、この間の学園の歴史の編集と執筆に当られておられる。

戸田昭治先生は、1954年3月に北海道大学教育学部を卒業されてのち、岩見沢農業高校と札幌啓北商業高校で15年間にわたって高校教育の指導を实践されたのち、本学（当時札幌商科大学）設立後間もない1969年4月、本学の体育実技担当の専任講師として、着任された。

開設一年後の本学には、おおむね平坦にされた地面があるだけで（今の50周年記念館のあたりに）、まともなグラウンドも、整備された屋内体育館もなかった。

したがって戸田先生は、当時の商大校地の周辺から野幌原生林に至る道路等を、保健体育理論の専任となられた安栄先生や、札幌短期大学の笹岡先生らとともに学生たちの先頭に立って走りながら、他方グラウンドや体育館の整備と、それにもとづく正規の体育授業への移行を、

やはり学生たちとともに、一步一步進めてこられたのである。この間の多くの知られざる労苦は、実に大変なものがあったと想像される。

この間にも、戸田先生は高校と大学の体育授業の分析を通じての体育学研究の業績を着実に積み重ねられるうえ、さらに近年には時代の進展に呼応して社会人から高齢者にいたる健康と体力の増進、スポーツが地域社会の発展と個人の生涯的発達にとって果たす機能の解明にまで広く考察を進められ、そのために多くの論稿を発表されており、理論と実践両面にわたるその功績により、札幌市社会教育功労賞（1983年）、北海道社会貢献賞（1993年）などを受賞されておられる。

鈴木秀一先生は、1952年旧制東京大学文学部教育学科を卒業後、同大学大学院（旧制）に進学して教育学（授業学・教育方法論）を専攻され、小樽商科大学と北海道大学教育学部を経て、1990年3月に北海道大学を退官後、同年4月、本学人文学部教授として着任された。しかし先生は、北大在学中から本学部人間科学科のありかたに強い関心を寄せられ、1984年から6年間にわたって本学の非常勤講師をも担当され、学生の卒論指導にまでご協力を頂いている。

教育学者としての鈴木先生の浩瀚なお仕事については、その分野に素人である私が、今あえて論評するまでもないであろう。デューイをはじめとするアメリカ及びヨーロッパから旧ソ連にいたる広範な教育方法学的研究と、それらをふまえてのわが国の教育実践との積極的な交流、現場の教師たちとの徹底した協同と討論そしてその理論化、これが先生の教育学の——ゲーテの『ファウスト』風にいえば——「母の国」であった。それは文字通り教育なるものの先生の全人格による生涯的な実践の過程であり、かくして先生は、本学退官後の今もなお意気ますます旺に、夕張市での「自由が丘学園」の教育創造に取り組まれているのである。

三先生が研究と教育の両面にわたって果たされてきたお仕事は、私たちの学部の不可逆の伝統を成している。それは何か。それは、本学部が、極めて広くかつ多面的な人間存在と人間形成を研究する、多彩な人材によって構成されていること、その有機的な統一体としてあり、またそのことを通じてのみ、本学と本道、ひいては世界の教育と研究に独自の貢献を成しうるのである、という、本学部の出立点にあった発想の持つ力である。世界がとことんまでアトム化され分散と昏迷に陥りつつあるように見える反面、相異なる側面や領域の間の予想しえなかった構造的同一性がますます深く認識されるに到っているこんにち（パラダイムとしての「複雑性」等）、多様性を通じての人間諸科学の統一性への視点の創造的貫徹、それにもとづく自己の研究領域の不断の学際的拡大の努力と構成員相互の協働のいっそうの発展とは、私たちの永遠の原点であり道標であろう。三先生の今後のますますのご健勝と、今後の生涯的なご活躍を、ここに切に祈念して結びとしたい。

1998年9月 学部再編構想策定の多忙のなかで